No. 38

1977. 2. 1

岐阜の博物館

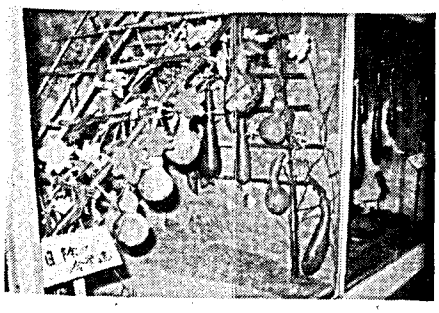
編集兼発行
〒483 羽島郡川島町
エーザイ工園
内藤記念くすり資料館 内
岐阜県博物館協会
TEL (058689) 3111
内線 540
振替 名古屋 70106

特集 全国博物館大会を終えて

館・園紹介 No.33

ひょうたん会館

〒503-12 養老郡養老町鷲巣
TEL<05843> 2-2500



栽培法のジオラマ

上：ひょうたん会館全景　下：館長さんと古瓢

養老公園への登り口左手に、ひょうたん会館はある。瓢箪の暖簾をくぐって中に入ると、館長である藤塚仁郎さんが出てこられた。一階は売店になっており、二階の展示室に案内していただく。瓢箪の造り方をよく尋ねられるので、昭和49年8月に開館されたとのこと。展示室中央には、栽培方法を示す1坪大のジオラマが10区画も並んでいる。苗床造り、移植、開花結実、加工（若い実をひもなどで縛って形を造ること）、棚造り、収穫、水に浸す、乾燥、酒による処理などが、季節を示す背景と共に解説されている。周囲の壁面には幾つもの展示棚があって、養老町の有形文化財に指定されている秀吉が用いたという愛瓢馬標、有名な孝子由来の瓢箪、福祿寿と名付けられた六角の瓢箪、古いものや新しいもの、赤褐色に光ったり斑紋のあるものなど数千個が並べられている。その他、掛軸、写真、書簡などもあって興味が尽きない。

館長さんは全日本愛瓢会の副会長でもあり、「瓢箪の丸味は和の精神を、まん中のくぼみは節度の大切さを教えているのですよ。皆さんにそれを知って戴きたいのです。」と語られる口調は実に穏やかだった。"酒を入れて四〜五日たったらあけてほす　又入れてみがく　日々是丹精"という色紙があったが、規格品全盛の今日、自分で作った瓢箪の酒器で一杯やるのも、おつなものではないだろうか。

なお、当館は立地条件がよく全国にも稀な博物館であるので、孝子物語に因む内容を、いっそう豊かにされることを期待したい。　入場料 小人50円　大人100円　年中無休　（写真・文　柴田）

昭和51年10月18～20日の3日間、秋も深まった高山市において、岐阜県博物館協会・高山市共催、文部省・岐阜県・岐阜県教育委員会後援のもとに、社団法人日本博物館協会の主催で、第24回全国博物館大会が開かれました。その成果を集大成する意味で特集号としました。

全国博物館大会会場

目　次

館・園紹介「ひょうたん会館」 …… 1

日本博物館協会高山大会を終えて …… 日本博物館協会理事 岐阜県博物館協会副会長 …… 郷　浩 …… 3

全国博物館大会を終了して …… 岐阜県博物館協会理事長 …… 長倉三朗 …… 4

開会式・パネルディスカッションから …… 岐阜県博物館協会編集部 …… 柴田佳章 …… 5

第1分科会「伝統地域における博物館の在り方」 …… 岐阜県博物館 …… 笠原芳雄 …… 7

第2分科会「地域産業と博物館のかかわり」 …… 岐阜県博物館 …… 小野木三郎 …… 8

第2分科会の座長をつとめて …… 岐阜県工芸試験場長 …… 赤川康夫 …… 9

第3分科会「解説手段と解説の在り方」 …… 瑞浪化石博物館 …… 奥村好次 …… 10

第3分科会を司会して …… 岐阜県博物館協会理事 …… 古川庄作 …… 11

全体会議より …… 編集部 …… 11

白川郷の秘境を往く …… 岐阜県博物館協会監事 …… 松田　充 …… 12

飛騨大鐘乳洞・乗鞍方面見学 …… 編集部 …… 14

岐阜県高山市の日本博物館協会全国大会の印象 …… 北海道開拓記念館々長 …… 犬飼哲夫 …… 14

全国博物館大会に参加して …… 国立科学博物館 …… 鶴田総一郎 …… 15

ローカルな全国博物館大会に参加して …… 鹿児島県明治百年記念館建設調査室 …… 市後崎長昭 …… 16

大会に関するアンケートより …… 編集部 …… 17

県内ニュース …… 18

日本博物館協会高山大会を終えて

日本博物館協会理事
岐阜県博物館協会副会長・岐阜城館長　郷　浩

昭和51年10月18～20日の3日間、高山市において日本博物館協会の全国大会を開催できたことは、地元岐阜県として欣快にたえないところである。事の起こりは、一昨年(昭和50年)10月、岐阜県博物館協会の事業として、県内の博物館活動に興味を持った人のために「学芸技術員」の講習会を開催したことにある。この画期的な試みには330余名の受講者を集め、好評であった。

世論の厳しい批判はあったが、そのとき、日本博物館協会から専務理事毛利正夫氏が来ておられた。雑談中、毛利氏に「昭和51年度全国博物館大会は何県で開きますか。」と尋ねたところ、「青森県の予定でしたが、準備ができないからといって断ってきました。」とのご返事だった。折よくそこに高山市民俗村の長倉三朗氏が同席しておられたので、「高山市で開催して下さいませんか。」とお願いしたところ、長倉氏は「帰って市長に相談した上でご返事します。」とのことであった。その後、快諾いただき高山大会開催の運びとなったわけである。俗に「瓢箪から駒が出る」といいますが、全く偶然なことから実現を見たのである。

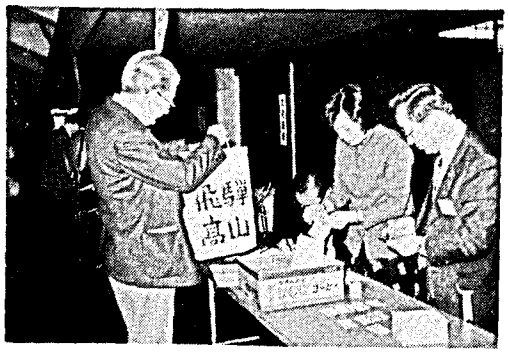
さて、全国大会が岐阜県高山市に決定したことは有難いが、初めての事であるから皆目分からない。幸いにも、内藤記念くすり資料館々長の青木允夫氏が事務的な面について日本博物館協会と連絡をとり、大会開催までにこぎつけて下さったことは、深く感謝するところである。

地元としては数回役員会を開き研究したが、一番の大役は分科会の運営であった。分科会の数を限定して、なるべく飛騨の実状を見学していただくことに重点をおいた。

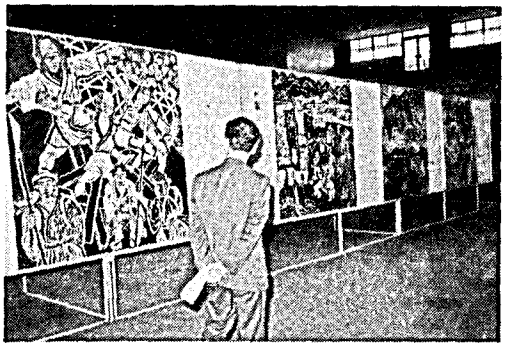
本大会の収穫としては、多くの博物館人に飛騨を認識していただいたことである。このことは、将来に向かって大きなはね返りとなり、飛騨の学術的・観光的両面においてプラスになるであろうことを信じて疑わない。

助言者の関野雄先生から、中国の博物館の現状を承り、われわれは一層この事業に精進せねばならないと痛感した。

本大会運営に当たられた関係者各位のご努力に対して、甚深なる謝意を表したい。なお、小生如きが表彰の栄に浴したことは、皆様の御陰と喜んでいる次第である。会議から受けた多くの助言は、今後の研究課題として真剣に取り組んで行きたいと思っている。



受付風景


会場を飾った大版画

全国博物館大会を終えて

岐阜県博物館協会理事長・飛騨民俗村名誉村長　長倉三朗

第24回全国博物館大会を高山市で開催し、その主催者側としての苦労や感想を書けとの事ですが、私自身は苦労もせず、皆様方のお力で無事終了することができました。従って御礼の言葉に替えて報告を致します。

24回大会が高山において開催されるについては前号で報告致しました。その節申しましたように6月には東海博物館連絡協議会が岐阜で行なわれたため、それまでは全国博物館大会の準備としては、旅館と会場の確保のみであり、東海博物館連絡協議会の終るのを待って行動を起こしたわけです。くすり資料館の青木允夫氏が東京へ出張して日博協との連絡、日博協から高山市へ出張、郷浩氏藤田松太郎氏と私の3人で岐阜県文化課への陳情などを繰返して、最後の会合は岐阜市で高山からと日博協の方々と岐阜在住の役員諸氏によって行なわれました。

高山市では民俗村管理事務所を本拠にして、山本所長の下に幅係長、藤田、駒屋両君が日博協との連絡、旅館確保、2転3転する会場の決定に苦労を重ねたことでした。会場については開会式と大会は飛騨体育館で、懇親会は市民会館で、分科会はグリーンホテルの3会場、3日目の全体会議は再び体育館と決定するのに時間を要しました。

高山市内の日下部民芸館、屋台会館、平田記念館、藤井美術館、八賀美術館、飛騨民俗考古館、飛騨工匠館、現具館、飛騨御殿に、財政的協力を得るために山本信三所長と私がお願いに上がり、また飛騨大鐘乳洞、白川村の明善寺には山本所長、幅係長がお願いに上がり、殊に鐘乳洞の大橋宜嘉氏には大変お厄介をかけました。

次に大会に参加される方々への土産や資料を入れて戴く袋は、ある電気メーカーから寄贈されるということであったが、それにはPRの文字が入っているので大会の文字を入れたものにしたく、版画の模様と大会の文字を入れた袋を300個用意しました。しかし前日になり参加者が多くなったというので商店用のもの50袋を増しました。

高山を会場として一番困ったのは会場のことでした。使用することになった体育館は広いだけで使うのに都合が悪く、350の席を作っても後部に空間が大きく空くため、その空間を塞ぐのに高山陣屋所蔵の高山市日枝中学校の生徒によって作られた「ひだの一揆」180㎠ 16枚の版画の大作を三角形に並べ壁面を作って会場を整えました。この会場作りには飛騨の里の職員、作業員、陣屋、国民宿舎、観光課、教育委員会などの職員、高山スキー場管理事務所職員、作業員等の40名によって行なわれました。天井が高く、また例年より寒い日が続いているため石油ストーブ30個を両側に並べて暖をとるようにしました。

懇親会の会場は体育館の隣りであったため、移動するのに都合は良かったが、建物も古く心苦しい思いでした。民俗芸能の金蔵獅子を公開してはという説もあったが時期的に難かしく、高山民謡保存会の民謡を見て戴くことになり、博物館の大会だから不満の方があったのではないかと心配していたが、そうした声は耳にせず安心しました。

分科会の会場は、第2分科会の会場が畳敷であり狭かったが、第1、第3の会場は満足して戴いたと思っています。

視察見学はAコースの白川郷方面は天生峠の

紅葉を観賞して戴くよう計画したのですが、集中豪雨の被害で通れず、往復共荘川経由で残念でした。

年間の天気の資料を調べて計画した日程でありましたが、夏以来の天候不順で当日は雨となり、皆様に山国の美しさを楽しんで戴けなく残念でした。白川方面には集古館の土田吉左衛門氏、建築家の八野忠次郎氏、乗鞍方面には県博の小野木三郎氏、福地化石館の山腰悟氏を説明のために同乗してもらい皆様に満足して戴けました。

日本博物館協会はもとより、岐阜県博物館協会からも前日から来て戴き、高山市からは観光課、教育委員会をはじめ飛騨民俗村、陣屋、郷土館、国民宿舎も最少必要人数を残して、会場へ連日40名を動員し整備やサービスに当りました。

人口6万余りの小さな市が不相応な大会を背負い、滞りなく終了できましたことは全く皆様のお陰であり、ことに県文化課、岐阜県立博物館、岐阜県文化財保護協会、岐阜県博物館協会、高山市内の各施設の皆様には厚く御礼申し上げる次第です。

大会第1日

開会式・パネルディスカッションから

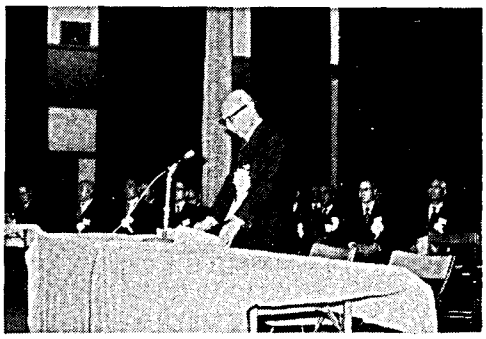
岐阜県博物館協会編集部　柴田佳章

正午に受付けが開始された。飛騨体育館のロビーは次第に混み合ってくる。大会場へ一歩入ると大版画が目につく。高山市日枝中学校の生徒による共同作品とのこと。飛騨一揆のようすが克明に描かれていて素晴らしい。ストーブの赤い炎があちこちに見られ、その心遣いに頭がさがる思いがする。

午後1時、開会が宣言された。徳川宗敬大会委員長の挨拶に続き、文部大臣、岐阜県知事、高山市長から祝辞が述べられる。岐阜県博物館協会監事松田充氏の司会の声が会場に凛々と響き、流暢に進められていく。

顕彰式では、多くの方々が賞状や感謝状を戴かれたが、岐阜県関係は次の3氏であった。岐阜城館長郷浩氏と飛騨民族村名誉村長長倉三朗氏には博物館事業に関して顕著な功績をあげられたということで賞状が、高山市長平田吉郎氏には本大会開催にあたって多大の貢献をされたということで感謝状が、徳川会長より手渡された。

その後、大会実行委員青木允夫氏からオリエンテーションと日程説明があり、日本博物館協会専務理事毛理正夫氏から会務についての報告があった。

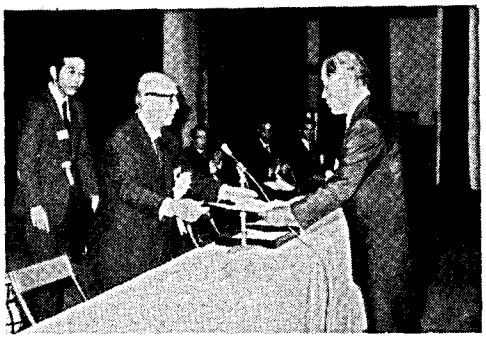


挨拶される徳川宗敬大会委員長

しばらく休憩し、午後3時から「伝統文化に関する博物館の諸問題」というテーマで、パネルディスカッションが展開された。講師の方々の論旨は、ほぼ次のようであった。

○関野　雄氏　（お茶の水女子大教授）

伝統とは、その地域社会の住民の価値判断によって受けつがれていくもので、古い伝統が壊されても新しい伝統に作りなおされねばならな



賞状を受けられる郷浩氏

い。この受けつがれていく生活のための知識、知恵の総体が伝統文化である。

高山市の屋台会館における屋台の保存、展示はすばらしいことで、博物館事業としても評価されるところである。飛騨民俗村は、生産技術や生活過程までも展示されている点がすぐれている。

地域博物館は、地域住民の資料収集を援助したり、絶えてしまいそうなものを拾いあげる役目がある。県単位の完備した博物館は、地域産業としての伝統工芸のあり方を指導したり、全国的な情報交換を進めていく必要がある。

○松下隆章氏　（京都国立博物館長）

古い文化をもとに新しい文化を取り入れ、次の文化を造っていくというくり返しが、日本文化の特徴であり、博物館は日本文化を支える上でたいへん意味がある。

博物館は、伝統文化を展示し新しい文化の創造に役立つことが大切であるが、わが国では、博物館が一般の人々から離れているので、ショウ的な催しなどをして、深くとけ込ませることや展示もわかりやすくする工夫が必要である。また、博物館資料の活用についての努力が足りないので、活用のための研究をせねばならない。民俗文化財の製作展示も大事にしていきたい。

○藤島亥治郎氏　（東京大学名誉教授）

伝統は必ずしも良いものばかりとは限らないが、良いものやそうでないものも、人々に見せることが大切だ。日本の建築には木という材料を用いてすばらしい仕事をしてきたという伝統があり、世界的に評価されている。

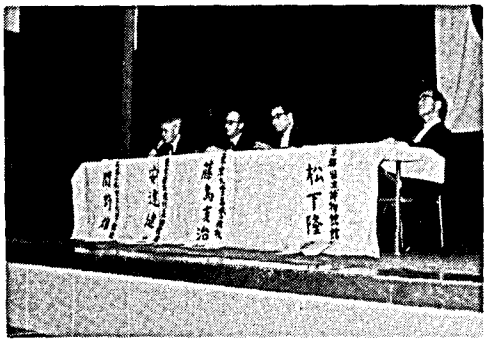
高山は、街並みすべてが一つの博物館であり、目下調査が行われているので、白川郷荻町と同じく保護の手が加わるだろう。飛騨の里のように、展示した民家の中に職人を住まわせるなど動いた部分が大事である。家には人を入れ、心を入れ、働きを入れないと生きたものにはならない。高山は、建物のみでなく生活伝統を生かす努力がなされていて大変結構だ。

○安達健二氏　（東京国立近代美術館長）

近ごろ文化財保護法の内容が変ってきている。今までは無形文化財は記録するのみであったが、進んで保存しようとする動きが出てきた。また、建造物も個々のものだけでなく、環境をも含めた建造物群として、点から面への保存が叫ばれ始めている。伝統文化財としての範囲は広いので、博物館として、何を扱ったらよいかの選択が必要だ。伝統文化を残す目的は、新しい創造のためにというばかりでなく、古いものを懐かしむという本能的、情緒的な面もあるのではないか。だから、展示する前の研究調査を充分にせねばならない。

われわれは、伝統文化の価値をあまり知らないので、地域博物館が日本文化、世界文化の中での地域文化の価値を明らかにすることが大切だ。そのためには、地域や県を越えた博物館も必要となってくる。

パネルディスカッション終了後、ただちに隣接する市民会館で懇親会が催された。



パネルディスカッションの先生方

走が用意され、飛騨に伝わる民謡や踊りが紹介されるなど、雰囲気は次第に高まっていき、きょう1日の緊張や疲れはすっかりほぐれたようであった。

会場の設営、資料の作製、大会の運営など、すべてがよく工夫し準備されていたが、全国博物館大会に対する関係各位の意欲と情熱が感じられた第1日目であった。

大会第2日

第1分科会「伝統地域における博物館の在り方」

座　長　郷　　浩（岐阜城館長）
助言者　関野　雄（お茶の水女子大教授）
　　長倉三朗（飛騨民俗村名誉村長）
　　土田吉左衛門（飛騨集古館々長）

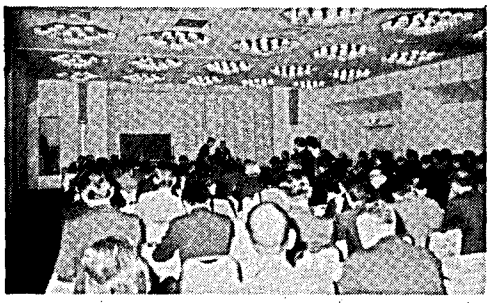
岐阜県博物館 学芸員　笠原芳雄

晩秋の高山らしい冷えびえした朝を迎えた第2日目は、会場をグリーンホテルに移しての分科会でした。こゝは高山市西部にある最新の施設で9階の展望食堂からは北アルプスの山並みが一望できるところ。第一分科会場にあてられた洋式集会室は早朝から100名近い参加者で、用意された席は満員の状況でした。9時すぎから順次6名の発表者による講演とそれに対する質疑応答という形で進められました。最初郷座長から飛騨全体が博物館であることを強調され、その中の伝統文化財の諸問題を討議したいとのあいさつがありました。続いて飛騨自然館の山腰悟氏は、奥飛騨の自然と民俗資料を保護する個人施設の運営と悩みを述べられ、国や自治体の直接間接の助成を訴えられました。次に当日午後の最大の視察施設である民俗村（飛騨の里）の成立の由来と運営について、名誉館長の長倉三朗氏が発表されました。氏が高山市から建設の構想を一任された時から「行政的に口だししないこと」、「黒字になっても利益は設備改善に使うこと」などの条件をつけてやられた由。ただ移築して並べるだけでなく、生かして使うような展示にすることをねらって建設を進めたこと。現在は利益を増設や時に防火設備の充実にむけていることなども述べられました。また、建物のためにも火をもやしているが、たき木の選定（ナラ材のみ）にまで気を配っておられることなどには感心させられました。ひき続いて飛騨大鐘乳洞の大橋宜嘉氏が洞くつを自力で発見開発した経緯、利益は展示面へ最大限に使い付属国際博物館を増設するなど自力運営のすばらしさを披露されました。経営にあたっては、入ってくれる（見る価値のある）展示をモットーにしていることを強調されたのが印象的でした。途中休憩の後、市内の老田野鳥館について老田正夫氏が、創設の発端は親子2代に亘る野鳥の研究であり、入館者数は少ないが根強い利用者があること、将来は館活動を広めていきたいことなどの点に言及されました。野鳥資料などについて助言があり、地方の熱心な収集に対する反応が感じられました。

午前の最後を使って、高山市の数多くの伝統文化財の修復を手がけてこられた建築家八野忠次郎氏が午後視察予定の4件について明快な解説をまとめられました。まず、高山の今日の伝統文化財の成立の素地について歴史的な条件を説かれました。高山陣屋は全国でも残り少ない代官所の建物で、前半分の役所作りと後半分の庭園のある居住区が一体となったもので、付属の郷蔵は高山城打ちこわしの時に移したものであること、高山屋台は封建社会の基盤となる屋台組にはじまり高山町人の心意気を反映するも

のとして発展したこと、日下部邸は金森氏（城主）の商業発展策が根となって発展した、高山の商人（町人）文化の総まとめともいえる家屋であること、白川村の合掌作りは特に古いものでなく、土地に合った建築であることなどを次々に話されました。そして、貧しいがために今日まで文化財として残されたものであることを強調されました。

昼食後1時に再開されて、飛騨集古館の土田吉左衛門氏から30数年も自力で収集された飛騨の石器類について、楽しくも努力のにじみでるような発表がありました。最後に助言者の関野雄氏から総括的なまとめが話されました。この地域の伝統文化の保存に努力している関係者に敬意を表すること、地域において各博物館が互いに横の連絡をとりあって向上すること、例を中国の博物館にとって観覧者の動員や親切な展示解説を望みたいことをあげられ、最後にこれからの若い人達に伝統文化の大切なことや郷土愛を、博物館が主体になってうえつけることが重要であると結ばれました。わずかの時間で飛騨地域の伝統文化について要点や問題点の一端を理解できました。自館の反省資料として参加者の方々に得るところの多い一時であったと思いました。



第1分科会会場風景

第2分科会「地域産業と博物館のかかわり」

座　長　赤川康夫（岐阜県工芸試験場長）
助言者　嶋崎　丞（石川県美術館副館長）
　　長倉三朗（飛騨民俗村名誉村長）
　　土田吉左衛門（飛騨集古館々長）

岐阜県博物館　学芸員　小野木三郎

分科会の冒頭に、飛騨地域の方々から、現況についての意見発表がなされた。土田吉左衛門氏から「飛騨地方の地域的特性と伝統産業の概要」、長瀬清氏から「飛騨の春慶塗について」、糖塚喜一郎氏から「一位一刃彫と一位細工について」、葭原基氏から「飛騨の家具発展の足どりについて」、長倉三朗氏から「飛騨の里と工芸村について」が話され、引続いて、嶋崎　丞石川県美術館副館長から、他県から眺めながら、飛騨と石川県との伝統文化・伝統産業を比較しつつ、博物館が積極的に地域の伝統文化・産業にかかわっていく必要性が、石川県美術館の事例紹介とともに話された。

高山市では、製作工程をふくめた地域博物館、あるいは産業展示館とも表現できるものが多く、それらが地域全体としてひとつの博物館の働きをもっているが、最も優れた最高の文化財を一堂に集めた美術館があったなら、地域総合博物館活動として最高のものになる。金沢の場合には、逆に、最高の文化財を前向きに出しすぎたために、過程・技法面を知りたいということに応える展示が少ない。

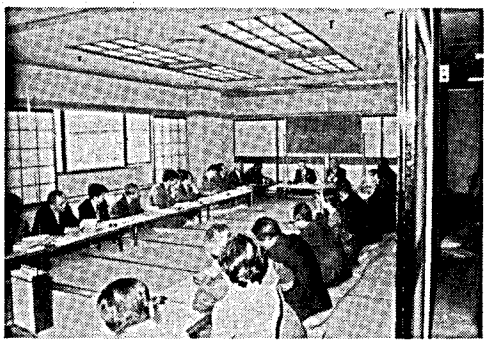
石川県美術館では、「石川県工芸作家選抜美術展」を開催し、県内在住の作家に作品制作を委嘱、すぐれた作品を買上げるなど、地域の伝統工芸発展のために寄与する努力をされているが、博物館の積極的な働きかけは、現在の若い伝統工芸従事者への励まし支えとなる。

飛騨の里のように、自立していかなくてはやっていけないような地域事情の中で、物をつくる博物館、過程を示す展示のあり方、またその諸活動にかかわる費用についても、いろいろな問題が山積みしている。

地域産業・地域文化、あるいは地域への愛郷心、そういうものが生まれてくるのは「自然」の中にあるのだから、やはり自然を見守りつつ、心豊かな生涯教育の場を目指して、生きる喜びを感じながら「自分でもやれる場」を、みんなで考えていく必要がある。費用の問題も、お互いに考えながら、補助を要求すべきものは要求し、若い人も中年以降の人も含め、あらゆる人々に生きて働きかける博物館づくりをしたなら、いきおい伝統文化、地域産業にも寄与できるにちがいない。

日本人に特に欠けているといわれる「思索する心」「創作する心」これをもっと芸術的な面からも、あるいは職人さんの心への理解を深める中で、博物館は積極的に取り上げ、展示、その他の教育活動を展開すべきである。

日本の博物館・美術館は、地域文化や伝統産業に寄与する仕事を、あまりやっていないという意見もあるが、地域の夫々の館園とそこにいる学芸員は、多くの障害・難関に頭を痛めつつも、博物館活動としての考え方を取り入れ、地域に対応する施策・方策を考えつつ、最大限の努力・奮闘をしているのが現実である。



第２分科会会場風景

地域産業と伝統文化とのかかわり、そういうものをお互いに調査研究していく中で、「生活の中に生きていけるもの」を作りあげていかねばならない。

以上のような方向づけを確認して、第二分科会は終了した。

第２分科会の座長をつとめて

岐阜県工芸試験場長　　赤川康夫

先ず本テーマを戴き博物館について素人の私は、その使命について早速百科辞典を開いた。曰く、「歴史、芸術、民俗、自然科学などに関する資料を収集、保管、展示して一般公衆の利用に供する施設」とあり歴史や機能について詳しく記してあった。そこで私は本テーマをどのように進行するか、焦点をどこに置くかを考えた。飛騨高山で開催されるなら、その意義を深めるべく郷土文化が地域産業にどのような影響を与えて今日を迎えたかについて、飛騨の文化を歴史的にふり返り、飛騨の伝統的な産業を中心に話題を進めることにしました。

本分科会を通じて特に感じたことは、テーマが漠としていたことです。今後は焦点をしぼり討論し易くするため、予め問題点を提起しておき、自由に発言できる場をつくること、また映画やスライド等を取り入れた説明は大いに効果があったので、今後はもっと用いてもよいのではないかということでした。

今回の第２分科会は座ったままで、全員が顔を見合わすことが出来る雰囲気で、むしろ親近感がもてた。出来得れば、サロン的ムードで語り合う雰囲気のほうが良い意見もでるのではなかろうか。参加者の良識に感謝を捧げるとともに、今後のご発展を祈ります。

第3分科会「解説手段と解説の在り方」

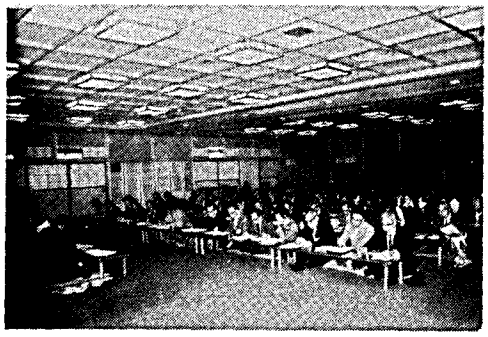
座　長　　古川庄作（岐阜県陶磁器陳列館々長）
助言者　　鶴田総一郎（国立科学博物館）
　　宮崎　　惇（岐阜県博物館）

瑞浪化石博物館　　奥村好次

当文科会では、5項目のテーマを設定して、解説のあり方について討論を行った。

最初に、宮崎先生が展示解説の機能的分類について、解説が必要の場合の機器及び解説者による展示解説の方法論を発表された。

次に、科学技術館の宮本先生が、オーディオ機器による展示解説の実例として、過去における利用について、その利点と問題点を指摘され、ついで現在の固定機器及び解説員を併用した展示解説について報告された。これに対して、展示解説はどの程度の学力を標準にしているか。又、展示解説を作る過程でどんなスタッフでどのような研究会を開いているかについて質問があり、中学生の平均的学力、展示企画から管理運営まで、関連業者にも協力を求め定期的に会合を重ね、一般の要求もアンケートなどで充分取り入れ、展示解説をより充実させるよう努力しているとの回答がありました。



第3分科会会場風景

ついで、屋台会館の谷田先生が、女子ガイドによる高山祭に使用される屋台の説明、ガイドの採用時における3ヶ月の研修方法などについて報告をされた。

次に、日本モンキーセンターの広瀬先生が、ガイドコーナーで学芸員が常に一般の見学者と接することにより、博物館学芸員と社会教育の専門家としての学芸員の役割について、スライドを併用してわかりやすく発表された。

休憩後、埼玉県立博物館の木部先生が、展示用印刷物、特に展示概要の利用方法について、今までの経験とこれからの利用法の発表があり、この問題に関連して大阪市立自然史博物館が一般普及用に配布している一枚のパンフレットの利用について、問題点を提供された。

次に、秋田県立博物館の磯村先生が、女子解説員の待遇、採用時の研修、展示解説・案内の実践例を報告された。これに対して、解説員の採用時における研修内容・時間、採用条件、解説の程度についての質問があり、磯村先生が、解説員は明朗で研究熱心な人を採用し、採用時に展示解説などの印刷物を参考にして2週間程度の研修を行っているとの回答がありました。又、谷田先生が、高卒以上を基準にして採用し定年はないとの回答がありました。

ついで、立教大学の佐々木先生が、スライドを使用し岐阜県博物館の展示解説パネル、プレートを事例として、展示の中におけるパネルの文字数、プレートの大きさ、解説原稿がもつ展示全体に及ぼす重要性について発表をされた。

最後に、鶴田先生が、当分科会のまとめとして、博物館の解説は、それを全く必要としない場合もあれば、解説をしなければ理解出来ない場合もあり、0～100％の段階で幅があり一括して取り扱うことは出来ない。又、解説は導入であり、学者用語を日常用語に変えてわかりやすく説明し、入館者とのつながりを作ることが目的で、知識を一方的に伝えるだけのものでなく、それぞれの人々が自主的に創造性を高め、文化的なレベルを上げていくための手助けをす

ることである。又、そのレベルを上げるための博物館とは、公開された資料をもとに確実なデータのつまった図書館（知識を伝える）であり、入館者自らが体験の出来る（実験・実習の用意のある）場所で、調査・研究の出来る場所でなくてはならない。解説者（説明員）は、本来博物館学芸員と同じでなければならないし、総合的な知識を備えた専門的学芸員でなければならない。との発表がありました。

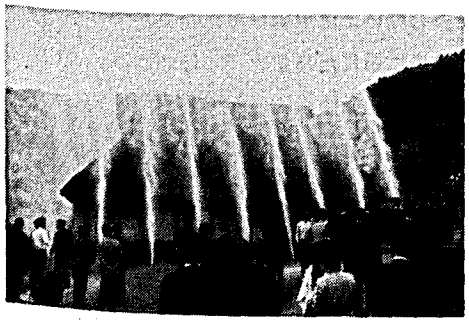
第３分科会を司会して

岐阜県博物館協会理事・岐阜県陶磁器陳列館長　古　川　庄　作

先ず第一に、終始あまりにもお上品な話のやりとりで、御無理御尤といった雰囲気を感じざるを得なかった。座長の力不足をいちはやく見てとったものだから、敢て発言を控えられた節があったのではあろうが。

解説の手段と方法という難かしい問題で、自分の館にそっくりそのまま通用すると考えられるものがあるとは考えられない。１００館あれば、１００の方法があって然るべきであるから、も少し当館ではこうした点で困っていると問題が投げかけられ、それに対してはこういうことで解決への緒を得たとか、こうしたらどうだろうかとの提言が投げかけられたらと想った。

館園の主流が大館、デラックス主義を標榜するあまり、群小の館園ではとてものことではないという気がしないでもなかった。



第２日巡見飛騨民俗村での放水のようす

必然的に生まれた館園でなくて、莫大な資金を投じて殻を作りあげているそれであるから、その見返りに入館者の多くをこそ誇らねばならぬことになり数の問題になっている。

ヤングを狙えとばかり、演出された手段・方法に重点が置かれ、来館者を迎合しすぎてはいないかどうか。館園を商品化しすぎた嫌があるのではなかろうか。

来館者に受動的な手段を与えすぎて、見て識る、聞いて識る、触れて識るを重視する余り、静かに自分で判ろうとする考え方への配慮がなおざりにされてはいないかどうか反省したかった。その意味で長岡美術館の方から、壁はSimple で 永遠の静けさを必要とし、その作品との対話によって、自分を高めるものであり度い。極めて静かな環境こそ必要であるとの発言が印象深い。時間のないままに中途で端折られたのが残念であった。全然性格の違う館園の実情にも耳をかたむけ度いものであると想った。

許される時間内での盛りたくさんの企画であれば致し方ないとしても、も少し部門別を数多くし、せいぜい３０人までで、親近感をもって語り合う、そうした雰囲気を溢れさせるような部会であり度い。

少くとも円形に近い座席の作り方を採ってゆくことが大切であると想った。

大会第３日　全体会議より

編集部

まず最初に郷浩第一分科会座長、赤川康夫第二分科会座長、古川庄作第三分科会座長から、

それぞれの分科会での論議の要旨、提示された問題点等の報告が行なわれ、引続き、犬飼哲夫議長が、本大会決議文案を朗読、採択に入った。会場から発言があり、今大会運営に当った地元高山市並びに岐博協等への感謝のことばが述べられ、決議文案は2～3の字句の訂正だけで決議された。

決　議　文

健康で文化的な人間環境を創ることは、現代に課せられた重要な課題であり、博物館はこの社会の要請に応え、文化の創造と人類への奉仕にその機能を発揮しなければならない。特に近年、社会教育、社会文化の質的向上が叫ばれているとき、我が国博物館の実態は果たして十分社会の要請に応え、且つその役割を果たしているものであろうか。深い自己省察に立って問題を究明する必要がある。

本大会は、伝統文化に関する博物館の諸問題について討議し、我々博物館の担う役割を果たすために、

1. 博物館は地域社会の伝統文化を保持し、且つ活用すべきである。そのため、各館園は自主性を保ちつつ、相互連携と協力を推進する。
2. 博物館は各地域の特色ある伝統産業の継承と発展に寄与するため、その理解を深めることが使命である。よって、産業博物館の充実・強化が極めて緊要である。

これに対し、国及び地方公共団体の強力な助成を要請する。

以上決議する。

昭和51年10月20日　第24回全国博物館大会

西村日博協副会長の閉会のことばののち、白川郷方面・乗鞍岳方面へと、エクスカーションに出かけ、全日程を終了した。

＜見学記＞

白川郷の秘境を往く

岐阜県博物館協会　監事　　松田　　充

10月20日といっても、飛騨路の秋は早い。その日、黄葉は時雨にまじって、見学のバス道を塞いだ。3日間にわたる大会は成功裡におわり、会員はようやく解放気分になった。

Bコースは乗鞍へ、Aコースのわれわれは白川郷へ。10時ごろ、およそ100名が2台に分かれて、最終会場の高山体育館を出発した。

往きの車内解説は、土田吉左衛門氏（飛騨集古館長）。ユーモア交りの話しっぷりで大変楽しかった。この先生は16年間も、陸の孤島で教鞭をとったとの話には頭が下がった。

★　奥飛騨の孤島ぶりのひどさは大変なもので、冬の雪積は3～5m、死の対決だという。事実、一村全滅の悲惨事もあったのだから、土着の人たちの労苦は、遊山気分で訪れる者には判ろうはずがないようである。

★"心細いよ白川郷は笠に落葉が降りかかる"しぐれに濡れた路を、バスはいっぱいの巾で走る。山峡の景観は山肌がすっかり紅葉して、人も通らず、音も聞こえず、悲壮美の寂漠さを感ずる。閉じこめられた気分がほぐされるのは、名解説に酔っていたからであろう。

★　孤島には孤島らしい伝統があり、芸能や習慣もある。人柱になった娘小糸の話や、ドブロク祭、さては城主が蛙になったり、憤死して血の畑ができたりで、車中は退屈しらずだった。

★　白川街道は峠が多い。おどり（小島）峠は1000m。土田先生はこの険阻な峠道を自転車をかついで、あえぎ喘ぎ通勤した由で、白川や荘川に初めて赴任する巡査や教員は、この峠で

まず、びっくりし、次の松の木峠では思案し、軽岡では辞職することを決めたというので、びっくり峠、思案峠、辞職峠の別名がついたというのも、うなづける話だとおもった。

★　小鳥峠から10分ほどで松之木峠に出る。幹三本が1本に見えこの名があるが、この清見村には、縄文時代の竪穴式住居趾を復元したものもある。土器・化石類が沢山出土したらしい。家は点々だが、山峡の紅葉はうつくしかった。

★　11時ごろ荘川村に入った。

新軽岡峠の入口には「千鳥格子」で有名な小さな御堂があった。その横の立札には「小鳥白川六厩(むまや)のお寺、こけら葺とは知らなんだ ― と古謡に名高い了宗寺と同じ棟領（飛騨の匠）が建立した」と書いてあるとのこと。この千鳥格子の組み方は謎とされていたが、今では高山市内にも模倣したものがあるらしい。

★　平家の落人はこの辺りから多いのだそうで、土地の人は、管絃の道に通じ、誰でも三味線や太鼓ができるし、美人も多いと承った。生憎と、そのろうたけた美女は見かけなかった。

★　「六厩杉天然生林」の荘川営林署の立札のあるあたりは1200mの天然杉の密生地帯だ。ゆるぎ（動揺）石はみょうごう（明郷）部落近い山にある有名な石で「斐太後風土記」には、「1人にてゆりても 10人にて揺りても同じほどにゆるぐぞ」とあって、高さ4尺5寸、長さ8尺。田中大秀は、竹取物語に、"ちびきにも引きざらまし大岩をいかでかよわき手にゆらぐらむ" ― と詠じた不思議な石のようである。

★　猿丸のあたりは、今昔物語に出る伝説や百済人と飛騨の工匠との技くらべ、宮本左馬之介・武蔵・岩見重太郎などのヒヒ退治、賑かな伝説や文学的な土地柄。エテ公が多かった様子。

★　荘川の新渕(あらぶち)には、土器や石器、平安朝時代の鏡など出土して、民族資料館もある。

ミボロ（御母衣）ダムは近い。11時37分着。

★　ミボロダムでは360戸が湖底に沈んだ。「わがふるさとは湖底の下に」を書いた若山芳枝女史は、「飛騨の里」に合掌造りを寄贈し、その記録は貴重だ。高崎達之輔がダムに沈むのを惜しんだ二本の墨染桜の話は、水上勉の桜守にも登場し劇化されて有名になった。樹令400年、今も見事に咲く。

★　「帰雲城趾」は白川村近くの山頂にある。山崩れで村人に多数のぎせいが出たが、このあたりに5000億の巨宝が埋っているという。

週刊誌も伝説の「飛騨鏡」をのせたりして、世の亡者たちの物欲をあおったこともある。

★　合掌造の代表のようにいわれる「遠山家」は大正時代まで50何人も同居していたとか。

★　合掌づくりは、白川村で発達し、荘川村に及んだ。白川の切妻に対し、荘川は入母屋が多いそうだ。天に向って合掌する正三角形の建築は2～4階と規模が大きく、雪国の生んだ知恵は釘一本使わず、黒光りの太柱に縄が幾重にも巻かれて、今では世界的なものになってしまった。研究書も多いが、東京のド真ン中まで身売りするようになっては、一抹の哀れが残る。

★　萩町や白川で見る合掌集落はまた格別な風情がある。明善寺の庫裡の窓から眺めると、しみじみ日本のふるさとのよさというものを感ずる。庫裡は徳川末期の合掌造り、楼門は重文。

★　帰途につく。13時35分に発つ。昼食は車ですませ、解説者は代って八野次郎氏。

★　天下の奇祭どぶろくまつりは、白川郷が紅葉に染るころに収穫を感謝し、天下御免のどぶろく酒を造って、白川連峰を背景に、異色の獅子舞や郷土民芸が奉納される。

秘境にのこる村人たちの楽しいお祭りである。残念ながら数日前に終り、あとの祭だった。

★　天生(あもう)峠のバス道は、17号台風で不通だった。できれば、白川郷から加須良・五箇山など訪れたかった。晩秋の陽は短く、時雨は続く。

★　泉鏡花の「高野聖」にでてくる黒い虫の話は、ご本人がこの峠を通っていないので、山ヒルのことは想像らしい。

"思いきや天生の嶺のほととぎす雪ふみ茶摘み声聞かむとは" ― 富田礼彦のこの歌も、茶摘じゃなく、菜摘みだろうといわれている。

★　この辺りにくると、娑婆での理くつは、小さなものになってしまう。うつくしい大自然のなかにいると、人間の素朴さほど美しく見えるものはない。煩わしさ無用の世界がこの秘境には現存している。ふしぎな旅をしたような気になったのも、しずかに心を洗ってくれた多くのものがあったからだろう。会員諸兄もご満足のようであった。

飛騨大鐘乳洞・乗鞍方面

編　集　部

小雨の中を予定通りバス二台に分乗して出発、飛騨民族考古館の坂本先生のお話で鐘乳洞へと向かう。高山市・丹生川村内の史跡を車中から見学しつつ、紅葉の盛りを楽しむも、直射日光に映える鮮やかな紅葉の色彩美は望むこともできず残念、それでも、飛騨大鐘乳洞では、洞入口周辺の山の斜面の雑木林からは、雨風に吹かれてパラパラと枯れ葉が舞い落ち、日本の秋の風情に「オウー」と声があがった。ここでは昼食をはさんでゆっくり見学、繊細優美な自然の造形、鐘乳洞を心ゆくまで見学、さらに大橋氏のコレクションになる銘石・奇岩、宝石、石を素材にした美術品等が展示された寿宝殿を見せていただいて、乗鞍岳へと向かった。

ここから岐阜県博物館学芸員の小野木三郎氏が、乗鞍岳の植物社会を案内されての山岳ドライブとなったものの、風強く、雲流れる悪天候の中で、時々、雲の切れ間にサッとのぞくわずかの視界を楽しむだけ、山頂付近では、それでもダケカンバ林やハイマツの低木林が見られ、高山帯の気分、それに教科書的に典型的に移り変わる垂直分布のようすだけは見ていただけたようである。

小野木氏は、学生時代よりこの辺りの植物社会を深く調査研究しておられるだけあって、その案内ぶりは明快で実にうまいものであった。

雨と強風、寒さにふるえ、山頂滞在も15分間ほどで引上げ、高山市へと向かった。帰路は、雨も止み、スカイラインから高山市周辺への視野もやゝ開け、長倉三朗先生のお話を聞きつつ、予定より約1時間早く高山駅前口帰着、それぞれ思い出を胸に、次回全国大会での再会を期しつつ散会した。

岐阜県高山市の日本博物館協会全国大会の印象

北海道開拓記念館々長　　犬　飼　哲　夫

日本博物館協会の第24回大会が、高山市で開催されたことは、意義深く、どちらかといえば交通の便にあまり恵まれず、遠隔の地の感が与えられているにかかわらず、南は九州北は北海道から、350余名の参会者があって、成功裡に終った。開催中の諸種の会合では、異口同音に、高山市そのものが博物館的存在であることが強調された。高山市の自然環境といい、多くの古くからの文化財が、ほとんど原型のまま保存されている点といい、この大会をここで開催したことは大きな収穫であった。

開催の準備はもとより、会期中に高山市の関係者の御心遣いや御世話は、真剣で熱意に溢れ至れりつくせりで、感激したが、今回の成功は高山市が具備している日本の文化財の粋と地元関係者の熱意の賜物と思われる。

実際に高山市内の文化財を全部詳しく見学するには、時間的に不可能で、名残りを惜しみながら退散した次第であった。高山市郷土館、飛騨の里をはじめとし、有名な高山屋台会館、さらに飛騨屋敷、春慶会館、民族考古館、日下部民芸館、吉島家、平田記念館等々飛騨の伝統文化を現実に物語る貴重な文化財の数々、これがまたよく保存されている点では、他の都市では見られない優れた状態で、予備知識の不足から、十分に時間的余裕を得られなかったことを後悔した。

これらの多くの優れた文化財が保存されているのは、高山市の地理的関係で、近代の便宜を主とした生活文化による大きな変貌を見なかったとも考えられるが、他面地域の人々の不便と保存経費の負担等、小都市には少々重荷の感があり、県或いは国の相当の補助が期待されるべきである。

さて今回の第24回大会に際しては、高山市のような、由緒のある環境下で開かれたこと自身が有意義であったが、地元の関係者の一方ならぬ御苦労が偲ばれ感謝に堪えない。

その上先ずパネルディスカッションでは、伝統文化に関する博物館の諸問題というテーマを取り上げ、安達健二、関野雄、藤島亥治郎、松下隆章の諸氏で夫々の分野の権威者が、まことに実のある識見を披露され、これが高山市の文化的環境とマッチして、かつてない真剣な雰囲気をかもされた。

さらに分科会のうち特に第2分科会では、高山市の伝統文化を継承し、実際にこれを活用している技術者が出席され、直接に説明を聞くことが出来て楽しかったが、伝統工芸の一位一刀彫、飛騨塗等の技術のほか、精神的な伝統のあることを察し感銘を受けた。これは確かに今回の大会の目玉の一つであった。

大会とは直接関係はないことではあるが、高山市の朝市は、かねてから聞いていたこの地方の風物の一つで、近代的な商品もあるが、多くはこの地方の産物で、山の産物もあり、懐しい風情がただよっている。また高山市の民宿は、他の観光地と異なり、この地方の伝統の慣習を十分に生かして、これに近代的衛生的配慮がなされていて、民宿の一つのあり方が示され、このようにしてとかく俗化し易い観光地の弊風が防止されることを切望する次第である。

全国博物館大会に参加して

～～～ 岐阜県博物館界に望むことなど ～～～

国立科学博物館　　鶴田総一郎

飛騨より斐太の方が鮮烈なインパルスを感じるここへ初めて足を踏み入れたというのも、随分うかつな話だが、そんな私がその機会を得られたのは、さすがに「博物館」大会だなどとも思った。とにかく、伝統文化、日本人の庶民のふるさとなどという想いが生々と心を潤しながら湧き上ってくる街のたたずまいと環境に、まずでき上ってしまったなという印象だった。

日頃「建物博物館」などという思想は過去のもので、まちぐるみ、地域ぐるみの環境博物館がこれからの指標であるべきだなどと主張しながら、その実、東京という人間性の全く影を潜めた近代科学技術と資本主義経済のど真中で、ぬるま湯につかって何となく生活させられている身にとっては正に衝撃であった。これが博物館だということである。

つまり、岐阜県の関係者の皆様の今回の大会の企画の第一の問題である「どこで」は見事に正鵠を射ていたということである。私とても最初から、抽象的一般的にはそうであろうと確信

していたが、この「だろう」を「そうだ」にするのが博物館だという意味で、全くそうであった。もちろん観光施設的すぎるとか、観光地そのものではないかとか、既に高山の本質が打算という線に沿って曲げられているとかの批判か反省は当然だと思う。しかし、これも含めて、トータルとして私にこれだなと思わせたこの場所選びは正に成功だったと思う。

初日の伝統文化と博物館に関するシンポジウムもぴったりだし、分科会の3つもそれなりに妥当だったと思う。もちろん私は第3分科会に出席した者であるから、全体としては推定である。そこでお願いしたいのは、せっかくこの地域や、岐阜にぴったりの今日的問題に取り組んだのであるから、他に問題が多数あることは当然として、すくなくとも今回の諸テーマは、岐阜県博物館協会または有志の方々で、今後も継続して追求していただきたいという点である。つまり、問題の所在と現状分析並びに作業仮説に相当する示唆のいくつかというのが、分科会シンポジウム．全体会議の討議内容の実態だと思う。この段階では、実は解決がない。この意味で、これから後の作業は、ずばり、調査研究（学術的な意味で）である。これはそんなに容易なことでは無く、過去の大会の決議や討議の結果の行末と照会してみればよくわかる。この点岐阜の皆様の企画の内容は、もう一つ割り切れる方向への可能性を秘めておられるように思う。その努力を打ち切らずに継続されることを心から望むし、必要があれば出向いてでも参加してお手伝いしたい心境である。

次に私が痛感したのは、第一回大会から参加し、途中何回か抜けたことはあっても終始博物館事業に専念しつつ参加してきた身にとって、年々歳々の人の変りようである。特に参加者の多くが館長その他管理職的立場の人が多いことも関係するだろうが、我々が一緒になって積み重ねてきた筈の成果が、どこに蓄積され、どこで発展的に継承されているのだろうかということである。

おおげさに言うと、昭和3年に協会が発足して以来、ほとんど同じことが繰り返されてきているのではないかと思う程である。既掲の提案と同じ事の繰り返しになるが、問題の提示と確認では結局こういうことになる。この意味で、本当の「日本博物館研究センター」のような調査研究機関があればなあとつくづく思う。ここは共同利用センターであると同時に、それぞれの時代、時期、博物館での貢献者のあげられた資料と成果の恒久的保管機関でもあり、名誉をたたえる殿堂でもある。野球の殿堂ではないが"Holl of Fame of Museum"が、裏方を主使命とする博物館人のためにこそ特に必要なのではないだろうか。

何れにしても岐阜の皆様に、ぜひ問題の解決への不断の前進をお願いしたい。

ローカルな全国博物館大会に参加して

鹿児島県明治百年記念館建設調査室 学芸担当主査　市後崎 長昭

きわめて長い海岸線をもち、本土と南方との接点をなす鹿児島県と、昔から「飛山濃水」という言葉で表現されている岐阜県とを比較して、その対照的な起伏に富んだ風土・文化に、以前から関心を寄せていました。また両県は姉妹県の間柄にあり、ここ数年間、教職員及び青少年の交換研修を重ね、学校教育・社会教育にその成果をみています。かような時に高山市で第24回全国博物館大会が開催されることになり、伝統文化に関して見聞するのに適した場所と考え、参加した次第です。

本大会は、初日の全体会から、討議に盛り上

がりを感じました。「伝統文化に関する博物館の諸問題」について、地元関係者の資料作成等の周到な準備、日常の活動から吸収された具体的な問題提起、関野雄氏はじめ指導・助言者の懇切な御指導がかみ合い、パネルディスカッションが円滑に展開されました。

2日目に参加した第1分科会「伝統地域における博物館のあり方」のディスカッションでは、高山における各館より、館の現状や運営についての報告がありました。ここでの討論、発表を通して形を成してきた、望ましい博物館のすがた・理念を念頭に、巡見では楽しく物を見て、多くのことを学びました。若山家・野首家等の民家と郷倉、そこに分散展示された民俗資料群から成る民俗館、旧高山測候所を移築し登山用具等を展示してある山岳資料館、さらに、ソリや養蚕用具等を陳列してある民家群と工芸部落から成る飛騨の里。これらを包みこんでいる広大な飛騨民俗村は、イロリに火が燃え、人間生活そのものの再現が試みられています。しかし、土田吉左衛門氏から真実きびしい白川郷の自然について教えていただき、現地にわずかに残る合掌造りを実際に見て、初めて、大家族制と結びつけて考えていた、間違った合掌造りの知識を改めることができたようです。小屋組の緊結に釘を用いない奄美の高倉と比較したり、古い民家の構造について、あれこれ考えてみたことでした。高山市内を一巡して、飛騨民俗村、屋台会館、その他町並保存の一環として保存されている高山陣屋、日下部民芸館等は、それぞれ工夫した陳列・展示がなされ、高山市という、まとまりのある町の観光とマッチさせて、文化財の保存策としては一つの方法であり得ると思っています。

10月中旬、寒からず暑からず、快い季節に開催された大会でしたが、南国薩摩から来岐し、会場に入り、何よりもありがたく思ったことは暖かく燃えているストーブの火でした。それに、岐阜県博物館協会で作成された「岐阜県の博物館要覧」とポスター「博物館へどうぞ」、何ともいえない温もりのある手引です。高山滞在最後の朝、陣屋前の朝市の見学に出かけました。年輩のタクシーの運転手さんが、「以前は、老婆たちが小遣銭稼ぎに、手車ひいて野菜売りに来たものです。」と親切に語ってくれました。

私は、高山市を中心にして、岐阜の一角をかいま見たにすぎませんが、当地の博物館関係者の並み並みならぬ熱意が町の人々にまで伝わっているように思えます。鹿児島が竹文化なら岐阜は木の文化だという感概と、あのカラマツの黄葉の美しさは今も鮮烈です。大会の機に、国立乗鞍青年の家所長として御活躍の郷土の大先輩、鮫島文雄先生、同じく薩摩男子で埼玉で御活躍の内田賢作氏に会えたのも、うれしいことでした。　岐阜県博物館関係者のお心づくしに感謝し、御健闘を祈ってやみません。

大会に関するアンケートより

編　集　部

大会の折、日本博物館協会事務局のほうで、大会についてのアンケートを集められました。幸いにもそれを見せていただけたので、その一部をここに掲載し、開催県としての参考資料にしたいと思います。

全体会は細かな配慮がなされ、非常によく運営されていた。地元の方々に負担をかけたと思うが、そのご苦労に感謝する。

パネルディスカッションでは、各界の著名な方のお話を聞いて有意義であった。もう少し時間をかけて深く突っ込んだ内容になると、もっ

とよかった。ただ、マイクの調整については一考を要した。懇親会では高山の特色が生かされ、楽しい和やかな雰囲気の中で交流が深められた。

分科会は、地元の特色ある説明を聞き参考になった。博物館活動も官製のものだけでなく、篤志家の努力がいかに多くの実績を上げているかがよくわかった。しかし、もっと参加者の意見を取り上げてほしい、開始時間を正確に、座敷の会場は体が疲れた ── という意見もありました。

また、民宿の主人が親切で、いつまでも良風を保ってほしいという一方、宿より会場までの輸送計画、宿の配分に工夫がほしかった ── という声もあったようです。

それにしても、今回は例年になくよかった。場所、風光ともに恵まれ、テーマも当を得ており、奥行きの深い大会であった。高山市や岐阜県博物館協会など関係の方々に感謝します ── などと、全体としてはたいへん好評で、大会の成功を物語っているものと感じました。

県内ニュース

岐博協役員会開かる

去る12月19日、岐阜レストホール　スポーツパルコにて、16名参加のもとに、昭和51年度の役員会が開かれました。郷副会長の挨拶の後、長倉理事長より、高山大会を無事終了したことについてのお礼の言葉がありました。青木事務局長からは、高山大会の仮収支報告と岐博協の収支中間報告、昭和52年度の予算案などが説明されました。また、小幡県立博物館長から県博開設に際しての協力に対する感謝の意が、広瀬顧問からは愛博協の活動などが述べられました。

なおその折、本機関紙に原稿を書いていただいた場合、県外の方は2000円程度、協会員は1000円（昭和52年より）の謝礼をさし上げることが決定されました。

表彰・受賞相次ぐ

・池村資料館に県教育委員会より表彰状

館長の池村兼武氏は、野鳥を研究し標本を作って展示するなど、理科教育に貢献されたということで、昨年11月20日に表彰を受けられました。氏の今後のご健闘を祈ります。

・瑞浪化石博物館に第9回東海テレビ賞

郷土の地質を生かした調査啓蒙活動、収集展示活動、国際的な学術交流などが評価され昨年11月29日に受賞されました。化石採集ができる博物館として、今後が期待されます。

・株式会社丹青社にデイスプレイ・デザイン'75～'76年賞「銀賞」

岐阜県博物館自然部門の課題展示室における系統樹の立体的デザイン処理、展示室全般の素晴しさが評価され、昨年12月15日に受賞されました。

新入会員・館園紹介

◎ 武田和忠氏　TEL <058464> 3344
〒503-01　安八郡安八町大森180
三洋電機株式会社　技術本部開発研究所

◎ ひょうたん会館　TEL <05843>2-2500
〒503-12　養老郡養老町鷲巣

編集後記

◎新年おめでとうございます。このところ厳しい寒さが続いていますが、皆様お元気でしょうか。「巳年の凶作説」などというものには惑わされずに頑張りましょう。

◎全国博物館大会のまとめと、反省の意を込めて本号を編集しました。原稿をお寄せいただいた方々に厚くお礼申し上げます。ここから新しい課題を読み取り、前進あるわれらの岐博協にしたいものだと思います。

（柴田学芸員）